

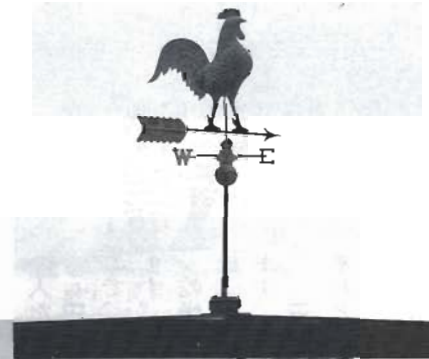
文学部の最近の動向

— 移転完了と

大学院改革への胎動—

文学部長 ◆ 湯浅信之

▶ 講義棟の屋根で未来をみつめる
英国製の風見鶏



▲最新の設備を誇る講義棟と庭園



◀ 文学部木造校舎は、昭和二十五年九月三十日竣工し、東千田キャンパス内では戦後最も早く竣工した建物で、当時は全学から羨望のまこととなった。

文学部の移転完了

平成六年三月に、文学部は西条キャンパスへの移転を完了した。思えば長い道のりであった。紛争を契機に大学移転が提案されてから、四半世紀が過ぎようとしている。

移転を決定した教授会では賛否が同数となり、当時の学部長であった柘井迪夫教授が賛成票を投じられて議決したことを知る人も、少なくなっている。しかし、古い建物には惜別の情を残しつつも、文学部の構成員は、新しい場所ですべて以上で充実した教育・研究の発展に努力したいという情熱に燃えている。

また、文学部の移転のために、協力を惜しむことなく努力してくださった多くの関係者のかたがたに、この場を借りて厚く御礼を申し上げたい。

文学部の新しい建物

正直のところ、これほど充実した教育・研究の場が与えられるとは、私自身考えていなかった。

文学部の建物委員会で最大の問題であったのは、移転によって建物の面積が減少するということであった。すなわち、旧キャンパスにあった木造の教育棟が基準面積外であったので、その分だけ削られる運命であったのである。

これは深刻な問題であったが、角筆文献資料室、瀬戸内海言語資料室、貴

重古典籍研究室、情報処理室などを設置するための面積を確保するとともに、できるだけ公正に面積を再配分することで、何とかこの問題を解決した。

全体の面積は九三五平米ほど減少したものの、十人程度のゼミを行うことのできる教官室、大学院生のための共同研究室三室、各研究室内に助手が専用して教育・研究に専念できる空間などを確保すると同時に、AV装置の飛躍的拡大を図った大講義室や、これまでなかったコンピューター・システムを備えたLL教室、将来のデスク・トップ編集に備えるための文字読み取り装置(OCR)、及び学部内のコンピューターを結び、将来は文学部を世界の文化的発信基地にするためのLAN機構などを設置することができたのである。

文学部の改革

新しい革袋には新しい酒を入れよ、とよく言われるが、これは本末転倒であって、新しい酒を新しい革袋に入れるべきである。すなわち、改革があつて移転があるべきものだと思う。

しかし、もっとよく考えてみれば、改革は日々の課題なのである。文学部は移転の最中であつて、多くの時間と労力を割いて、新しい文学部のあるべき姿を模索してきた。

その結果、次のいくつかの点で改革を行うことができた。先ず、大学院の定員充足を図るために、入学試験から

画一的な外国語の試験を外すことにした。文学部は、従来から外国語を重視してきた。この態度が変化したのではないが、従来の外国語試験の反省にたつて、専門科目と密接な関係で語学力をテストする方がよいと考えたのである。

次に、課程博士を出すことを目途として、博士課程後期に入学した者は五月末日までに研究計画を提出し、二年次の九月末日までに博士論文の概要を提出し、研究科委員会の承認を得れば、三年次の十月末日までに博士論文を提出することにした。

さらに、これにに応じて修士の条件にも再検討を加え、従来の修士論文に代わつて特定の課題についての研究の成果を提出することも修士の学位が取得できるようにした。これは、博士課程前期と後期の有機的関係を確立するとともに、生涯教育や再教育にも貢献できる道を開くためである。

このような改革は平成六年度入学生から適用されるものであるが、既に昨年度においても、文学部では開關以来初めて定員いっぱい^かの大学院生の合格発表を行ったし、指導教官の努力によって、課程博士も飛躍的に多くの学生が取得するようになっていた。

しかし、文学部の改革はその緒にいたばかりである。これまでは学部内の意志統一と条件整備に精力を注いできたが、これからは、学内的にも学外的にも、外に向かつて働きかけるべきである。

今後の課題

従来、文学部は小講座制を堅持する姿勢を取ってきた。これは、学問の伝統を守り、専門的研究の深化を図るためであった。今日でもその必要性はいささかも失われていない。

しかし、学生人口の減少、若者の活字離れ、教養的教育の見直し、大学院の高度化の必要性などの諸問題に対処するためには、小講座制に固執することなく、最も好ましい体制を検討する時期にきていると思われる。

既に、文学部内ではいくつかの改組案を検討しているが、文系の他学部との協議を重ねて、全学的に整合性のある将来像を明確にすることが急務である。そのために、文系四学部の間大学院問題検討委員会を、総合科学部との間には大学院問題懇談会を設けていただいている。このような協議の場を通して、実行可能な成案が今年度中に得られるならば幸いである。

最後に一言、文学部の主張を述べさせていただきたい。どうも最近、学内、学外ともに理科系の論理で教育・研究態勢を押し進める傾向がなきにもあらずなので、これに対応する文系の論理の構築に努力し、あらゆる機会を通して、文学部の特質とレゾン・デパートルを理解してもらつてもりである。

(ゆあさ・のぶゆき)